

協同的な学習環境をつくるためのグループワーク

－考え方とその実践－

佐瀬 竜一（常葉大学教育学部）

キーワード：協同的な学習環境、アイスブレイク、グループワーク

【企画趣旨】

協同教育は様々な教育現場で活用されており、一定の成果を挙げている。協同教育における学び、協同学習が成立するためには、学びの場が協同的な学習環境であることが求められる。Johnson, Johnson, & Smith (1991) は協同的な学習環境をつくり出すための基本要素として、互恵的な相互依存性・積極的相互作用・グループ目標と個人の責任の明確化・小集団スキルの促進・活動の振り返りと改善手続きの5つを挙げている。しかし、コミュニケーション力（特に対人関係能力）の低下によって自ら友達を作ることが難しく孤立する児童・生徒・学生が増えている、一見対人関係が健全であると思われる児童・生徒・学生も実際の関係が希薄で表面的なものである場合が多いなど（宮下・杉村, 2008）、上記の要素を十分に満たして協同的な学習環境を創り出すことが教育現場では今まで以上に困難になってきていると考えられる。実際に、積極的に活動したいと考える学生と興味がない学生とが同じグループになった場合にグループの関係がうまくいかない、友達同士で同じグループになった場合にふざける、さぼる、グループ活動や対人関係に苦手意識を抱く学生がグループにうまく溶け込めない、などの理由により協同学習が機能しない場合があることが指摘されている（深津, 2013）。

したがって、協同学習を教育現場で今後さらに正しく推進していくためには、今まで以上に様々な工夫、具体的には協同学習が成立するための準備もしくは促進する環境を作り出すための工夫が協同学習、特にその導入時に必要であるといえる。

昨年の12回大会時に行ったワークショップ「協同学習に必要なコミュニケーションスキルを高める方法」では、協同的な学習環境をつくるために指導者が何をすべきなのか、何ができるのかについて、カウンセリングや様々なグループワーク、心理学の考え方や手法を取り入れたワークによって、「聴く・質問する・伝える」といった協同学習に必要なコミュニケーションスキル（への意識）を高めて、協同的な学習環境をつくるための方法について体験的に学習した。

今回は昨年の内容を一部復習しながら、特に協同的な学習環境をつくるためのグループワークについて何からどのように始めればよいのかという導入に焦点を当てる。具体的に

は導入のためのワーク（アイスブレイク）を行うために必要な考え方と実践におけるコツについて体験的に学ぶワークショップを行う。

【ワークショップの流れ】

- (1) 企画趣旨と進め方の確認
- (2) アイスブレイクとは？
- (3) アイスブレイクにおける3つのコツとは？
コツ① ルール
コツ② 体と心をほぐす
コツ③ 知る
- (4) 協同的な学習環境をつくるためのアイスブレイクの流れ
体験
解説
- (5) グループワークの注意点や活用方法の検討
- (6) 質疑応答・振り返り・参加者同士の情報交換

上記の流れに沿って進める予定であるが、参加者のニーズなどに応じて柔軟に対応できればと考えている。様々なワークを実際に体験してもらっただけでなく、質疑応答や振り返りなどを通して参加者の方の各現場での実際の活用・応用方法について検討する時間も設け、本ワークショップの内容を各自の教育現場に持ち帰って実践できるようになることを目指したい。

なお、昨年のワークショップ「協同学習に必要なコミュニケーションスキルを高める方法」への参加の有無に関係なく、参加可能な内容にする予定である。

【引用文献】

- 深津達也 (2013). 「協同学習」を取り入れた大学教職授業の成果と課題 研究紀要, **10**, 121-133.
- Johnson, D. W., Johnson, R. T., & Smith, K. A. (1991). *Active learning: Increasing college faculty instructional productivity*. ASHE-ERIC Higher Education Report, No.4. Washington, DC: The George Washington University, School of Education and Human Development.
- 宮下一博・杉村和美 (2008). 大学生の自己分析—いまだ見えぬアイデンティティに突然づくために— ナカニシヤ出版

アクティブラーニングの効果を高めるチームの作り方

前田 芳男（岡山大学地域総合研究センター）

キーワード：アクティブラーニング、チーム作り、ジグソーパズル、チームの質

1 研究の背景と目的

国立大学法人岡山大学は、平成26年度より「実践型社会連携教育プログラム」の全学展開を進めている。その教育内容は、具体的な社会の課題解決を念頭に調査や提案をしたり、NPOや行政等の現場に参加したりして学ぶものである。例を挙げると、①岡山市が実施する中心市街地の交通社会実験に際して、各種計測調査や聞き取り調査を行い、データを分析し提案する、②かつて公害病の発生を経験したコンビナートのある地区で、患者、企業、行政などの関係者に聞き取り調査をし、地域づくりを考える、③外国人学生と日本人学生がチームになり、林業関連の企業にて長期（3週間から1ヶ月）インターンシップをする、④生活困窮家庭の児童に対する放課後の学習指導、居場所作り支援を通年でを行い、生活困窮者支援の一翼を担う、⑤高校生と大学生が若者の政治参加を話し合うワークショップを企画・運営する、などである。

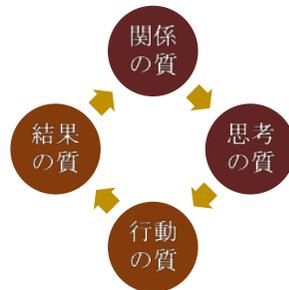
こうした授業では、グループ討論などを通して学生が協同学習することが多くなる。グループ作業が学生の能動的な学習態度や意欲を引き出す効果は大きい。しかし、グループ作業という形だけで、それをアクティブラーニングと言うことは避けなければならない。さらに、チームで何かの課題に取り組む際、そのメンバーがお互いを信頼し、チームで取り組むことの効力を信じていないならば、有用な成果は得られないし、往々にして逆効果になることを肝に銘じておかねばならない。

このことを踏まえ、本研究は、アクティブラーニングの効果が高まるようなチームづくりの方法を、実際の授業での創意工夫を繰り返しながら開発することを目的としている。研究成果は、本学の教育開発センターを通して全学的に共有し、上記の教育プログラムに役立てる。

2 アクティブラーニングの効果を高めるチームづくり

マサチューセッツ工科大学のDaniel Kim教授は、右図のような組織の成功循環モデルを提唱し、組織の4つの質が大事であると指摘している。

本ワークショップでは、この「組織の質」の考え方を、調べ学習などに取り組む生徒や学生のチームに援用し、



簡単なワークを通して「アクティブラーニングの効果を高めるチーム作り」をする手法を体験する。

組織の4つの質は、実際には、調べ学習などの活動の中で循環しながら高まっていくものであるが、本ワークショップでは、その疑似体験をすることになる。授業のアイスブレイクの手法の一つを体験する、とすべき内容である。

3 ワークショップの内容

以下の通り120分のワークショップを行う。

①ジグソーパズル【30分】

チーム間競争で、幼児用のジグソーパズルの完成の速さを競う。完成したら元気に手を上げ、その勢いのまま全員で握手する。幼児用パズルであり大人なら簡単にできるのであるが、その作業の中でもリーダーシップや役割分担を実感することができる。



②記憶が頼りスケッチ大会【30分】

例えば「ライオン」「奈良の大仏」など題を与えて、記憶を頼りにスケッチする。絵で表現することは意外と難しく、これらを正確に描くことはなかなかできない。しかし、チームで力を合わせて論理的に考え、描き直すと、ずいぶんまともな絵になっていく。これを体験することで、思考と成果の質の向上を実感できる。

③取ってほしい手【30分】

チームのメンバーが、自分が持っている「知識」「技術」「興味」「経験」を表明し合い、互いに必要とする知識や技術を述べ合う。また、全員の知識や技術を組み合わせてできる「新しいビジネス」や「ボランティア活動」を考える。これを通して、関係の質について考えることができる。



④意見交換【30分】

上記の結果を受け、「チーム作り」について話し合う。ここで体験する手法は、先述のように授業の中で試行錯誤して考案したものであり、実験等を通して論理的に効果を検証したものではない。ワークショップを通して参加者同士が意見交換し、考案した手法の改善や使い方を検討し、共有の知識としたい。

協同する心を育む幼児期の音楽活動

—協同的な学びの姿勢・基盤を育むためには—

植田 恵理子(京都ノートルダム女子大学)

キーワード：音楽活動、協同する心、幼児期、気づき、協同的な学び

1. 企画主旨

小学校の現場では、子どもたちが自主的に学び合う授業を目指し、協同の学びをどのように進め、学びの活性化につなげるかについて模索が続けられている。一方、保育現場は、協同的な活動を保育士が意識しているかどうかは別にして、「一緒に遊ぶ」「一緒に考える」ことがほぼ日常茶飯に行われている。例えば、保育中の遊び一つにしても、「何をしようか」という保育者の言葉かけに対し、何をして遊ぶか（テーマの設定）、どのように遊ぶか（ルール・手順の設定）、どのようにしたら全員で遊べるか（かかわりを考えた遊びの設定）を子どもたちが考え、意見を出し合い、挙がった意見を活動に活かしていく場面もある。このような意見の交換は、保育者と子ども、グループに分かれた子ども同士の「対話」の中で行われることも多いが、「他者と協力して活動する」体験として、演劇的な活動・音楽活動の中で、動物等の登場人物になりきり、セリフとして意見を交換する等、保育者が構造的に保育に取り入れることもある。

保育現場では、平成27年度から施行された、子ども・子育て支援新制度の中で謳われている保育の質向上に対し、子どもが主体になる「協同的な学び」を踏まえ、様々な試みを行う園が増えている。例えば、鳥取県の仁慈保幼園における、一人の子どもが興味を持った水仙の匂いから、身の回りの匂いを出す花等に園児が興味を持ち、良い匂いと臭い匂いがするものを選別して、手作りの香水を作っていく活動が挙げられる。この活動の中では、手作りの香水が腐ってしまった経験から、長期間良い匂いを持続するために必要なことを子どもたちが考え合い、そこで挙がった意見をまとめ、香水を扱っているメーカーを訪問して質問し、市販の香水に近づけるための試行錯誤を行っており、「みんながつながり、ひろがる保育」として紹介されている。

また、言葉を用いて意志を伝えること、表現することが苦手な子どもに対しての配慮を考えつつ、協同して活動を深めていく実践を行った園もある。大阪府のS幼稚園で行われた、障がいがある子どもも含めて、園児主体で行う劇遊びプロジェクトが例として挙げられる。この活動の中では、障がいがある子どもが無理なくセリフを言えるように、他の子どもたちが、セリフの順番と流れを考えている。特定のセリフを定めず、「〇ちゃん、怒って」と場面の状況を説明し、アドリブでセリフを言う場面を配置する等、様々な立場の子

どもが、物語の中で、なくてはならない存在となり、楽しめるプロジェクトである。

保育現場で行う音楽活動も、単に歌をうたって遊ぶ、楽器を演奏して楽しむ、手遊びをして遊ぶだけではなく、活動の過程の中で、伝え合う、考え合う、アイデアを提供し意見を調整し合う等、相手と「折り合う」こと、目的を共有し、ともに課題を解決する音楽的な体験となることが望まれている。また、音を感じる、ともに聴き合う、音を通じて感じたことを共有する等、子どもの主体性を大切にしつつ、協同する心を育むための音遊びを、活動の中に構造的に盛り込むことは、今後、ますます求められていくと予想する。

協同的な学びの姿勢・基盤は、単にプロジェクト的な活動を行うだけで培われるのではなく、子どもたちが互いに刺激を受けながら、自分の意見を取り上げられたい、受け入れられたりする等、自己発揮できる場所を発見することによって育まれていく。人とかかわることにより、自他の長所等に気づき、相手の意見に納得する経験、活動中に起こる葛藤、共感の中で「気づき」を得る過程を通して、活動が、より豊かで楽しい経験に変わっていくことが、協同する心を育て、協同的な学びの姿勢を深め、協力して活動を行う基盤を育むと考える。

本ワークショップは、協同的な学習に不可欠な、協同する心の育成のために、どのような活動が必要であるかを、幼児期の音楽的なアプローチを通して、体験的に学び合うことを目的とする。協同的な学びの姿勢・基盤を育むための、「音楽活動」の有効性をともに考えたい。

2. ワークショップの流れ

- (1) 企画主旨と進行の確認
- (2) 保育現場の協同的な活動について
- (3) 音楽活動の中で、協同する心を育む

<ワーク>

- ・聴き合う活動、静寂を楽しみ共有するワーク ～協同で行う環境作り～
- ・わらべうたを用いたワーク ～伝え合う歌あそび～
- ・手遊びを用いたワーク① ～意見をまとめる試み～
- ・手遊びを用いたワーク② ～様々な立場の子どもが楽しめる活動・課題解決～
- ・歌詞の意味を考える活動 ～イメージを共有する～

以上の流れで進める予定であるが、参加者の反応・興味に応じて、ワークを追加、差し替える可能性がある。様々なワークを体験するだけではなく、質疑応答や振り返り等を行い、参加者のご意見も頂きながら、ワークを進めたいと考えている。

参考文献

大豆生田啓友(2014)「子ども主体の協同的な学びが生まれる保育」学研 pp.12-25

アクティブラーニングを成立させるための

看图アプローチ

山下雅佳実（緑生館専攻看護学科）・菊原美緒（鳥取看護大学）

石田ゆき（日本医療大学）・鹿内信善（福岡女学院大学）

キーワード：看图アプローチ、協同学習ツール、ビジュアルテキスト

I 看图アプローチとは

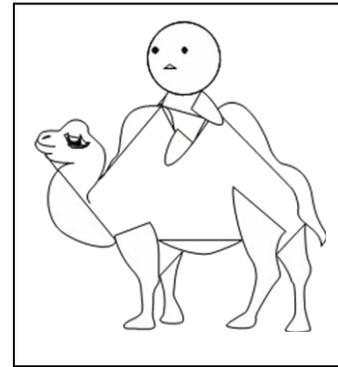
英語圏の多くの国や地域では、「見ること」をカリキュラムの中に取り入れている。その目的はビジュアルリテラシーの育成である。「ビジュアルリテラシーとは、絵や写真、図表、動画といった視覚テキストを読み解き・発信する力のことである。(奥泉 2006, p.38)」見ることを重視した教育は、中国でも行われている。中国語では、ビジュアルテキスト(絵図)を読み解くことを「看图」とよんでいる。また、絵図を読み解いた内容を作文として発信させる「看图作文」という方法も普及している。しかし現在中国では、看图作文の指導が形骸化し、看图作文が本来もっている教育効果を発揮できていない。そこで鹿内は、中国の看图作文を「ビジュアルリテラシーを育成していく方法」として洗練していく研究を行ってきた。鹿内は、中国の看图作文に心理学や物語論の研究成果を取り入れ「新しい看图作文」を開発してきた。この研究から次のような成果が生まれてきた。「①読み解き活動を創発するビジュアルテキストの制作方法、②ビジュアルテキストを読み解く処理モデルの構成、③読み解き処理モデルを活用した授業づくりの方法、④ビジュアルリテラシーを育成する授業モデルの構築等々。」これらの成果を、作文教育以外の教育領域に適用していくことを「看图アプローチ」とよんでいる(鹿内 2015)。

II 看图アプローチを用いた授業実践例

看图アプローチは、学習者を動機づける方法や協同学習を活性化させる方法を提唱できる。さらに、看图アプローチで用いる「見ること」は、能動的に見ることを意味している。このため看图アプローチは強力なアクティブラーニングツールにもなる(鹿内 2015)。看图アプローチは汎用性が高い授業づくりの方法である。これまでに国語や地理(鹿内他 2016a)、生物(溝上他 2016)などの教科や領域で、看图アプローチの有効性を検証する実践研究が行われている。さらに看護教育では、看護の基盤である「基礎看護技術」の習得に向けた技術指導(鹿内他 2016b,2016c)などで実践研究が行われている。看護教育においても

アクティブラーニングツールとして汎用性が高いことが証明されている。

【看图アプローチで用いるビジュアルテキスト(一例)】



今回の看图アプローチワークショップの内容は、上掲のビジュアルテキスト等を用いた看图アプローチ協同学習を実際に体験してもらうことである。体験的に看图アプローチが強力なアクティブラーニングツールになることを理解してもらい、各自が教育現場で実践できるようになることを目指していく。

【引用文献】

- 奥泉香 2006 「見ること」の学習を、言語教育に組み込む可能性の検討『リテラシーズ』2, pp.37-50, くろしお出版。
- 鹿内信善 2015 『改訂増補協同学習ツールのつくり方いかし方—看图アプローチで育てる学びのカー』ナカニシヤ出版。
- 溝上広樹他 2016 高校生物における看图アプローチを利用した授業実践—ウニからその生態と東日本大震災を考える—『福岡女学院大学大学院紀要発達教育学創刊号』pp.21-25。
- 鹿内信善 2016a 看图アプローチをキーワードにした校内授業づくり研修の試み—南筑高校の事例—『福岡女学院大学大学院紀要発達教育学創刊号』pp.57-63。
- 鹿内信善 2016b 看图アプローチ, 学習者は「みて」何を考える『看護教育』57 巻 3 号, pp.212-217。
- 鹿内信善 2016c 看图アプローチだからできる協同学習ファシリテーション『看護教育』57 巻 4 号, pp.298-305。

ジグソー法を使った美術鑑賞教育

松村 佳世（京都大学）

キーワード： 鑑賞教育、絵画、比較鑑賞、知識構成型ジグソー法

ワークショップの目的

1. 知識構成型ジグソー法の授業を実際に体験することで、メリットや授業の作り方を理解する
2. グループでの対話による美術鑑賞を通じ、絵やものに対する見方の認識を深めたり、新たな見方を獲得したりする

集団において創造される知識

協同学習を通じて自己の知識の構築や深まりを促進するには、(1)個人思考 (2)ペア・グループでの対話、(3)全体討論、(4)個人の内面化の4つの段階を行きつ戻りつしながら、集団内で共同的に構成される知識（間主観的知識）の成立に貢献し、その成果を自分の中に取り入れることが必要である。このような工程で獲得された知識は、先行知識と複雑に結びつく「納得解」として吸収されるため、いわゆる一斉型の授業で得られる知識に比べ、転移・活用されやすいと考えられる（水野, 2016）。

上記(1)～(4)の段階を効果的に授業に適用する方法として、知識構成型ジグソー法（以下ジグソー法）がある。ジグソー法とは、いくつかの下位課題（エキスパート課題）の答えを結び付けることで、より大きく複雑な問い（メインの課題）に答えるようデザインされた授業づくりの型である。下位課題は各課題ごとに担当が分かれたエキスパートグループと呼ばれるグループによって探求され、その後各課題のエキスパート1名ずつが集まって再度グループを形成し、より大きく複雑なメインの課題に挑戦する手順となっている。再形成されたグループには、各エキスパート課題に関する知識を持つ者は1人しかいないため、その1人は残りのメンバーに下位課題について適切に説明する必要がある、このことにより参加者が責任感を持って学習に臨む環境が自然と作られるという特徴もある（三宅他, 2016; 東京大学大学発教育支援コンソーシアム推進機構(CoREF)の WEB サイトも参照）。

美術鑑賞ワークショップ

美術鑑賞には唯一の正解は無いが、文化圏という大きな集団において、先に挙げた共同的に構成される知識が複数存在しており、それらを探求する学問が美術史や芸術学、美学

であるといえる。このワークショップは対話を通じて、絵画作品を見ることを楽しみながら深く本質的な知識に結びつくような気づきを得ることを意図してデザインされている。

ワークショップの流れ

1. ジグソー法の概要説明
2. ジグソー法を使った授業：フェルメール『デルフトの眺望』の比較鑑賞
 - (1) プレ演習
 - (2) イントロダクション
 - (3) エキスパート課題
 - ・『デルフトの眺望』と写真を比較してみよう
 - ・『デルフトの眺望』と音楽を比較してみよう
 - ・フェルメール『牛乳を注ぐ女』と抽象画と比較してみよう
 - (4)ジグソー課題
 - 『デルフトの眺望』特徴や魅力は何か、エキスパート活動を通じて気づいたことをもとに説明しよう。
 - (5)クロストーク
 - (6)振り返り

<講師情報>

- 2010 京都造形芸術大学修士課程修了
- 2016 東京大学大学総合教育研究センター・日本教育研究イノベーションセンターによるオンライン講座「インタラクティブティーチング」修了（3期）
同講座リアルセッション（対面講座）履修（3期）
- 2015～ 京都光華女子大学短期大学部ライフデザイン学科「ライフデザイン特論」ゲスト講師

<参考文献>

- 水野正朗「学びが深まるアクティブラーニングの授業展開——拡散／収束／深化を意識して」安永悟・関田一彦・水野正朗（編）2016.『アクティブラーニングの技法・授業デザイン アクティブラーニングシリーズ 1』東信堂.
- 三宅なほみ, 東京大学 CoREF, 河合塾（編）2016.『協調学習とは——対話を通して理解を深めるアクティブラーニング型授業』北大路書房
- 東京大学大学発教育支援コンソーシアム推進機構(CoREF). <http://coref.u-tokyo.ac.jp/>